

42031

教科書文庫

4
815
41-1907
20000 81512

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

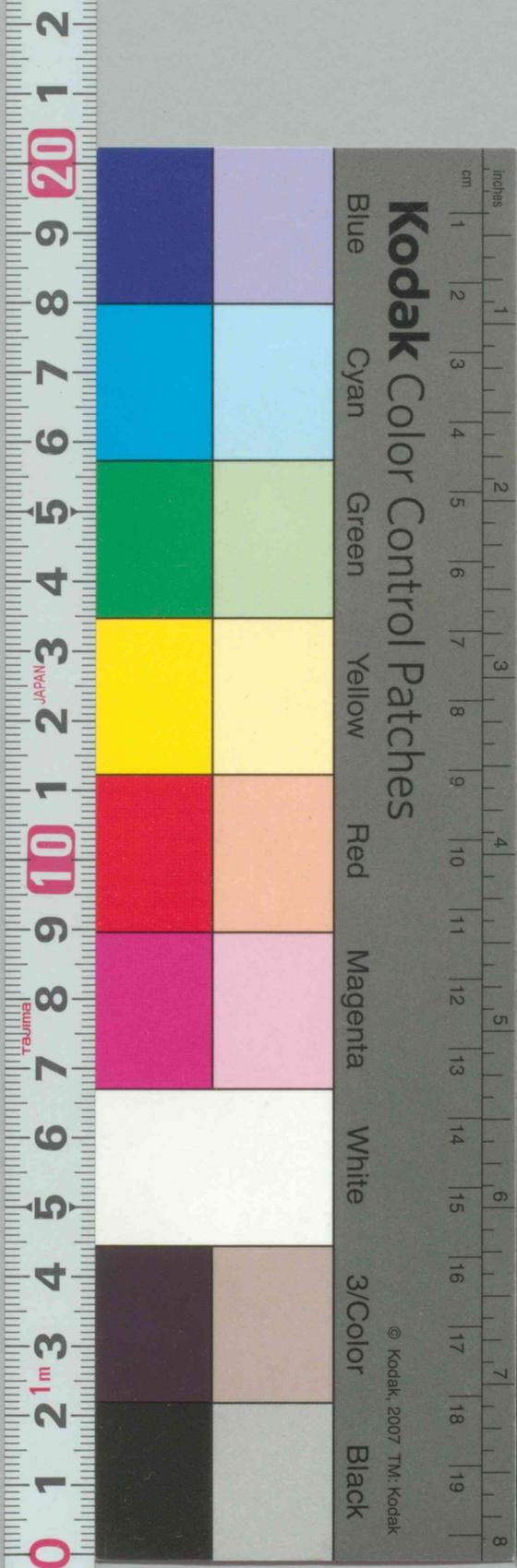


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
815
明40

中等教科

明治文典

訂正

卷之二



42  
815  
明40

明治四十二年二月十四日  
文部省檢定  
中等學校師範學校國語科用

文學博士芳賀矢一著

訂正

# 中等 教科 明治文典

卷之二

東京

合資  
會社

富山房藏版

資料室



## 卷の二教授上の注意

一、第一篇に於て品詞箇々の分別を教へたるを以て、本篇に於ては各品詞相互の關係を學ばしむるを主眼とし、體言及び用言と助詞との連結、用言と助動詞との連結を教へ、最後に體言と動詞との關係を説きて、動詞の自他、主語、客語、補語の性質に及び、第三篇の文章論に接續せしむ。

二、用言と助動詞との連結は之を活用連語と稱し、助動詞を時、法、式、相の四種に分ち、尙指定、比較の助動詞をも加へてその連結を表示せり。活用連語の表は一見甚だ複雑なるが如くなれども、一を以て他を推すべきが故に、實際上生徒の之に習熟せんこと極めて容易なりと信ず。總合

したる形に於て活用連語を學ばしむること、本書の目的とする所なれば、教授者諸君はよくこの意を諒とし、常に活用連語の全體を口語と對照して教授せられんことを望む。

三、助動詞中に於て今文に用ゐざるらん、めり、ましてん、なん等の如きものはすべて之を中古文法に譲り、四年級以上に教授することとなせるは編纂の趣旨にいへるが如し。

四、助動詞連結の部に於て文法上許容にわたることは其處々に注意を與へ、卷末に文部省の文法許容に關する規定を附録とし、以て學生の參照に資せり。教授者は先づ從來の規則を教へ、然る後許容の事に關して注意を與へられんことを望む。

中等教科 **明治文典** (訂正) 卷之二 目次 **六**

第二篇 品詞相互の關係

第一章 體言と助詞との連結 ..... 一

練習一、 ..... 九

第二章 動詞活用の名稱及び意義 ..... 九

練習二、 ..... 一三

練習三、四、 ..... 一四

第三章 形容詞(附形容動詞)活用の名稱 ..... 一五

第四章 助動詞活用の名稱 ..... 一七

第五章 動詞と時の助動詞との連結 ..... 一九

第六章 動詞と法の助動詞との連結 ..... 二三

五、本書を讀むに先決として、  
 其の目的を明かにせしむるべし。  
 又、本書の編纂に當り、  
 文部省の文法許容に關する規定を  
 附録とし、以て學生の參照に資せり。  
 教授者は先づ從來の規則を教へ、  
 然る後許容の事に關して注意を與へられんことを望む。

第七章 動詞と否定の助動詞との連結……………三七

第八章 動詞と受身使役の助動詞との連結……………三〇

練習五……………三三

練習六……………三三

第九章 動詞助動詞連結の誤謬……………三三

練習七……………三六

第十章 形容動詞と助動詞との連結……………四一

練習八、九……………四三

第十一章 時、法、相の意義の轉換……………四四

練習十……………四六

第十二章 指定及び比較の助動詞の連結……………四七

第十三章 活用連語……………四九

練習十一……………五一

練習十二……………五三

第十四章 用言及び活用連語と助詞との連結……………五五

練習十三……………五九

第十五章 用言の慣用語句……………六〇

練習十四……………六三

第十六章 體言と用言との關係―主語、述語  
客語……………六四

練習十五、十六、十七……………六八

第十七章 主語の轉換……………六九

練習十八、十九、二十……………七四

第十八章 補語……………七五

附録

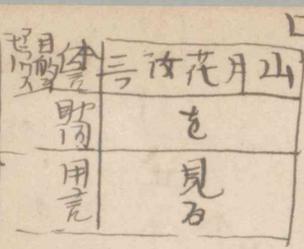
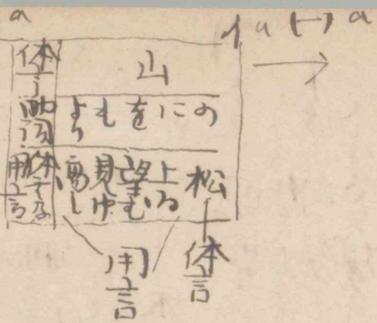
活用連語表第一

活用連語表第二

文法上許容に關する事項

中等教科 明治文典 (訂正) 卷之二 目次終

西文ハ三體ハ所ナシト助詞ノ里居ルコト  
其ノ意味ヲ變代スルモノト知ルコト



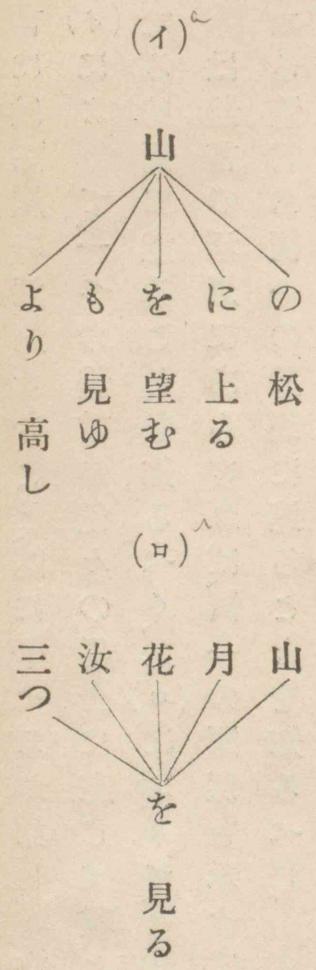
西文ハ三體ハ所ナシト助詞ノ里居ルコト  
其ノ意味ヲ變代スルモノト知ルコト

中等教科 明治文典 (訂正) 卷之二

文學博士 芳賀矢一著

第二篇 品詞相互の關係

第一章 體言と助詞との連結



中等教科明治文典 卷之二

示(し)るは  
木の枝 私の本  
この字の字同柄

(3)の(3)の字同柄  
言(こと)は南條(みなと)に  
後(のち)は

字(じ)を  
人(ひと)に  
家(いへ)に

例(れい)米(こめ)改(か)め  
米(こめ)改(か)め  
毎(まい)し

體言には語尾の活用なきこと、既に學べるが如し。右の例の(イ)によりて、一つの體言が色々の場合に應じて種々の異りたる助詞に連ることを知るべく、又(ロ)によりて、これ等の助詞は體言の活用にあらざれば、同一の關係を示すには如何なる體言も同一の助詞に連ることを知るべし。

- (1)の 樹の枝 三つの柿 汝の母
- (2)が 我が家 三が一 君が代 君が歸るを
- (3)を 送れば 書を讀む 文を作る 五つを與ふ
- (4)に 先生に問ふ 汝に與へん 二つに割る
- (5)へ 東京へ行く 諸方へ通知す 前へ進む

木の枝  
木の枝  
木の枝

- (6)より 六時より始まる 獨逸より歸る 山より高し
  - (7)まで 九時まで勉強す 神戸まで行く
  - (8)と 酒と煙草とは衛生に害あり 三と二と合すれば五となる。
- 助詞には體言と體言との間の關係を示すものあり、體言と用言との關係を示すものあり。
- 以上の助詞は最も普通に用ゐらるゝものにて、大方は日常の口語にも用ゐらるゝものなり。
- これらの助詞につきて注意すべきこと左の如し。
- (三) 太郎が球を投げる(口語) 太郎球を投ぐ(文語)  
人が枝を折る(口語) 人枝を折る(文語)

くも有り得じかとの  
と馬に用じし場合  
い下二体より来りし  
今もえん改訂す  
例 口語人がゆく  
文法 人ゆく

口語 一人が飯を喰ふとき  
文法 一人の飯を喰ふとき  
口語 一人が飯を喰ふとき  
文法 一人の飯を喰ふとき  
口語 一人が飯を喰ふとき  
文法 一人の飯を喰ふとき

口語にてかく用ゐる「が」は文語にて全く省くべきものとす。但し

人が汝を愛するのを知らない  
君が歸るのを送れば

といふ如く、口語にて下にのを添へたる語句の上にかゝる

人の汝を愛するを知らず  
君が歸るを送れば

の如く「の」或は「が」を附加ふるなり。  
君が歸りし日。

の如く、下に體言ある時も同様なり。

- 〔四〕 東京に在り 東京へ行く

日西に没す 船西へ行く

「に」は時間にもせよ、場所にもせよ、或定まりたる一點を示すに用ゐる。「へ」は方向を示すに用ゐる。この區別は、口語にては混同して用ゐらるゝこと多し。

〔五〕 漢書と史記の列傳とを讀む  
漢書と史記との列傳を讀む

「と」は事物を並べて指定する助詞なれば、その並ぶる體言の下に一つづつ添ふるものとす。右の例を見て、その異同を知るべし。口語にては下のを省くこと多し。

(注意) 附録文法許容に關する事項第十三項を参照せよ。

- 〔六〕 (1) 花は櫻木人は武士  
(2) 舜も人なり我も人なり

「字」それと「強」の語又  
 五然法係詞と云ふ

人ぞ行く麻でむ  
 今やなほ

五係詞 一五係詞  
 五係詞 一五係詞

たが 五係詞 五係詞  
 なま 五係詞 五係詞  
 が 五係詞 五係詞

こま 五係詞 五係詞  
 の用詞 五係詞 五係詞

又オニ終止法係詞となる

- (3) これぞ日本一の名馬
- (4) 生還するもの三人のみ
- (5) 祝ふ今日こそ樂しけれ
- (6) 鳥すら恩を知る
- (7) 雨降り風さへ吹く

右の中もはの二つは口語にも普通に用ゐれば明瞭なるべし。ぞこそのみは共に多くの中にて殊に一つの事物に重みを置いていふときに用ゐる助詞なり。すらは物を比較して輕きものを擧ぐるとき用ゐるさへはあるが上に物の添はる意をいふとき用ゐる。口語のさへは文語のすらを用ゐるべきときに用ゐらるゝこと多し。

この種類の助詞は、文の中より省きても、文の意味に格別の

すらり輕きを存せしむるさへ  
 二不入五係詞  
 係詞

ゆれこ行く

變化を起さず。

〔七〕 雲か山か吳か越か  
 人やさき我やさき  
 蝶よ花よと育つ

さても降つたる雪かな  
 かやは疑問よは呼びかけ、感動かなは感動に用ゐる。かやは亦感動に用ゐることあり。

〔八〕 これをば見よ  
 我には許せ  
 山よりも高し  
 何處までも見ん  
 これぞと思ふ

二つ意味を備へて

かやの用法  
 二、三、疑問、さへ不入用  
 係詞は人や  
 二、三、終止法係詞、用ゐる  
 係詞は  
 二、三、感動、さへ不入用  
 係詞は人なれどしか  
 二、三、終止法係詞、用ゐる  
 係詞は  
 二、三、感動、さへ不入用  
 係詞は

われこそは無官の大夫敦盛

右の如くいくつもの助詞の重り合ひて用ゐらるゝこと多し。かゝる場合には、それらの助詞の意味を重ねたるものなり。

〔九〕 口語にて綴る

一錢とてもなし

人にして人に非ず

人として鳥に如かざるべけんや

義經をして平氏を討たしむ

右の如く、及びしては直接に體言につゞかず、既ににと又はをに連りたる體言につゞく。にてにしては口語の「て」であつての義なり。

練習一、左の助詞を用ゐて短文を作れ

よりは	をも	よりも	までも	すらも
のみは	へも	には	にも	

### 第二章 動詞活用の名稱及び意義

〔一〇〕 動詞にはそれら語尾の變化即ち活用あり。これより、その活用の名稱と意義とを學ばん。

奈行變格活用の動詞は六つの活用形を有するものなれば、之によりて説明するを便利とす。

第一活用形の「死な」は「死なば」と用ゐられて、未だ成立たぬことを假にいふ形なれば、未然形といふ。また「死に難し」の如く、直に他

後根 後尾  
 死行 未然形 不定法  
 死に 連用形 中止法  
 死ぬ 終止形 終句本  
 死ぬ 連体形 終句本  
 死ぬ 已然形 終句本  
 死ぬ 命令形 終句本  
 未然形 仮定  
 人死す 命を賜ふ  
 連用形 甲言連なる後打  
 終止形 文章 止まる 行 止まる 行  
 終止形 文章 止まる 行 止まる 行  
 終止形 文章 止まる 行 止まる 行

建休取 訓力本 考達りたの法 形 了ら  
例は 訓力本 考達りたの法 形 了ら  
命令形は命令令えし場  
例は 訓力本 考達りたの法 形 了ら

の動詞又は形容詞、即ち用言に連る形なれば、連用形といふ。  
第三活用形の「死ぬ」は「人死ぬ」の如く言止むる形なれば、終止形といふ。  
第四活用形の「死ぬる」は「死ぬる人」「死ぬる時」の如く、體言の上につづく形なれば、連體形といふ。  
第五活用形の「死ぬれ」は「死ぬれども」「死ぬれば」の如く、或條件の已に成立せるを許していふ時に用ゐる形なれば、已然形といふ。  
第六活用形の「死ぬ」は命令をいふときに用ゐる形なれば、命令形といふ。  
奈行變格には以上六つの活用形あり。同一の方法を以てこの六種の形に他の活用の動詞をあてゝ考へ見よ。

木	上	下	上	下
木	木	木	木	木
木	木	木	木	木
木	木	木	木	木
木	木	木	木	木
木	木	木	木	木

建休取 訓力本 考達りたの法 形 了ら  
例は 訓力本 考達りたの法 形 了ら  
命令形は命令令えし場  
例は 訓力本 考達りたの法 形 了ら

〔二〕 四段活用の動詞には四つの活用形あるのみなれば、讀まば讀み難し、讀む、讀む人、讀めども、讀めとなりて、終止と連體とは同形、已然と命令とは同形なるを知る。  
未然 連用 終止 已然  
よま よみ よむ よめ  
〔三〕 良行變格活用の動詞も、同じく四種の活用形を有し、「あらば」「あり難し」「あり」「ある人」「あれども」「あれ」となりて、連用と終止と同形を有することのみ、四段活用に異なり。  
未然 連用 連體 已然  
あら あり ある あれ

終止	未然	連用	命令	終止	連用	命令	終止	連用	命令
け	き	け	け	け	け	け	け	け	け
け	き	け	け	け	け	け	け	け	け
け	き	け	け	け	け	け	け	け	け
け	き	け	け	け	け	け	け	け	け
け	き	け	け	け	け	け	け	け	け

第一活用に於て、未然、連用、命令の三つを兼ねぬ。但し命令には「よ」といふ助詞を付くべし。

未然 連用 終止 連用 已然

おき おく おくる おくれ  
すて すつ すつる すつれ

〔二四〕 上一段活用、下一段活用の動詞は三種の活用形あるのみなれば、第一活用に於て三役を兼ねる外、第二の活用形にて、終止、連體の二役を兼ねたり。命令に「よ」を添ふることに前に同じ。

未然 終止 已然  
連用 連體

口語動詞の場合三行下ろしは、終止、連用、命令

〔二五〕 左行變格、加行變格活用の動詞は、五つの活用形を有するを以て、第一の未然形にて命令を兼ねるのみなり。但し命令に「よ」を添ふることに前に同じ。

未然 連用 終止 連體 已然  
命令 感じ 感ず 感ずる 感ずれ  
こ き く くる くれ

(注意) (一) 口語動詞の活用には終止連體の區別なきを以て、文語を書くにこの二者を混同することあり。注意すべし。  
(二) 動詞の連用形は名詞となる形なり。

練習二、左の活用形の名稱を問ふ。

食は未 信じ連用 願ふ連用四段 見え連用下二段  
 立ち連用四段 起くる連用三 得る下二 連用 耻ぢ上三 連用  
 棄つ上五 終止 焼くる下二 連用 流す最 終止  
 及第す終止 卒業せま終止 書け 終止

練習三、左の動詞の六種の活用形を記せ。

持つ 禁ず 堪ふ 著る  
 悔ゆ 止む

練習四、左の文に誤あらば正せ。

- (イ) 私慾を制すことは難く、放逸に流ることは易し。
- (ロ) 今や秋高く、馬肥ゆ時なり。

形容詞の活用三種有り  
 一、し、き、けれ、  
 二、し、し、し、けれ、  
 三、し、し、し、けれ、  
 未連終連  
 あし あし あし  
 よく よく よく  
 今日まで 大ま 牙二

(ハ) 人、才智なきときは、業を執り身を立つと能はず  
 疾病流行して、死すもの多し、  
 感慨極りて涙のみ流るゝ。  
 (ニ) 金鞍の公子は之を以て輿車の代とし、或は之を競争せしめて  
 娛樂の用に供する。

### 第三章 形容詞(附形容動詞)活用の名稱

(二六) 前課に於て學びたる六種の活用に形容詞をあてゝ考

- へ見よ。
- 善くば……………未然
- 善くあり……………連用
- 善し……………終止
- 善き人……………連體

合はば自ら大層の光金やト  
 天気がちいしとほしけり  
 花のたけあつてもあめも  
 紅色は清く  
 文章の結構は  
 止る用  
 断絶は用しう  
 用

善けれども……………已然

故に形容詞の四つの活用形に於ては、未然形にて連用を兼ぬることを知る、形容詞には命令形の活用なし。

未然 連用 …… 終止 …… 連體 …… 已然  
 よく よし よき よけれ

(注意) 口語の形容詞活用には終止連體の區別なし。

(二七) 形容動詞はいづれも良行變格と同じく活用するを以て、其役目の分擔も全く良行變格の活用に同じ。これには命令形もあり。

未然 終止 連體 已然  
 よから よかり よかる よかれ  
 詳なら 詳なり 詳なる 詳なれ

副詞  
 多く 少く  
 之とは あり  
 方敷有る部敷無る部  
 尚地持取居用  
 五取 今分  
 形容動詞活用  
 変格活用同一

のわいよと  
 だるり  
 だるり  
 だるり

第四章 助動詞活用の名稱

(二八) 第一篇に於て助動詞の活用には動詞に等しきもの、形容詞に似たるもの等あることを學べり。故に助動詞も亦それの動詞、形容詞と同じく、各段の名稱を有す。

(一)	未然	終止	連體	已然
(2)	られ	らる	らるる	らるれ
(3)	せ	す	する	すれ
(4)	させ	さす	さする	さすれ
(5)	しめ	しむ	しむる	しむれ

下二段活用に等しきもの

	(二)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
	(1)	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
	(2)	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
	(3)	ら	り	り	る	れ	れ
	(4)	べから	べかり	べかり	べかる	べかれ	べかれ

(注意) □は現今用ゐぬ印なり。第一篇にいへる如し。

良行變格活用  
用に等しきもの

〔二九〕 未然 終止 連體 已然

〔三〇〕 未然 連用 終止 連體 已然

〔三一〕 終止 連體 已然

〔三二〕 連體 已然

〔三三〕 終止 連體 已然

〔三四〕 終止 連體 已然

〔三五〕 終止 連體 已然

〔注意〕 英語の直譯にてしの連體形を終止形の如く用ゐる風あり。轉じて今の文にも多く用ゐれども、なるべくは書かざるをよしとす。附録文法許容に關する事項第三項を參照せよ。

が ぬが ぬぬ ぬ

### 第五章 動詞と時の助動詞との連結

(動詞の時)

〔三〇〕 「讀ま」は未然、「讀み」は連用、「讀む」は終止、連體、「讀め」は已然、命令なること前課に之を學べり。左の如く助動詞と連りたる例を見よ。

(1) 讀まる

(2) 讀みたり

(3) 讀むべし

(1)は受身の意味をあらはして、未然の意なし、(2)は「たり」の助動詞につゞきて終止せず。これ等の例にて、未然連用以下の名目つゞきて終止せず。これ等の例にて、未然連用以下の名目は活用の一つの功用につゞきてのみ名づけられたるを知るべし。動詞の種々の活用形は、一方に於ては尙他の助動詞に連るべき役目あり。

助動詞は獨立しては其意味をなし難く、動詞は助動詞の助なければ種々の作用をいひあらはし難し。故にこの各種の活用形より、種々の助動詞に連りて、各種の連結を形造るなり。以下次第に之を説かん。

(三) 雨やむ 鳶とぶ

現在完了 一 たり  
過去完了 一 たり  
未来完了 一 たり  
手まじり

「やむ」「とぶ」の如き單純なる動詞にては、現在に起る動作をいひあらはすことを得れども、過去に起りし動作、又は未來に起るべき動作をいひあらはすこと能はず。故に時の助動詞を附加へて、動作の時間の關係を明瞭にす。

- (イ) 雨やみたり。 過去完了
- (ロ) 雨やみき。 過去
- (ハ) 雨やまん。 未来
- (ニ) 雨やみたりき。 過去
- (ホ) 雨やみたらん。 未来完了

(イ)は動作の今正に終れることを示す。故に現在完了の時といふ。(ロ)は動作の過去に終りしことを示す。之を過去

過去完了 一 たり  
現在完了 一 たり  
未来完了 一 たり  
手まじり

の時といふ。(ハ)は動作の未來に起るべきことを示す。之を未來の時といふ。(ニ)は完了の時と、過去の時と重なりたるもの、(ホ)は完了の時と、未來の時と重なりたるものにて即ち(ニ)は過去の或時に於て動作の已に完了せることを示し、(ホ)は未來のある時に於て、動作の完了し居る事を豫定して示す。故に過去完了、未來完了の時といふ。是に於て動詞の時には左の六種の區別あることを知る。

(1) 讀む 現在

(注意) 現在は過去未來等に對していふ。時をいふ必要な場合には時の助動詞を探らざれば同じくこの形を用ゐる。以下皆之に倣ふ。

(2) 讀みたり 現在完了  
讀めり

(3) 讀みき 過去

(4) 讀みたりき 過去完了

(5) 讀まん 未來

(6) 讀みたらん 未來完了

(注意) 「やみぬ」の如く用ゐるぬも亦完了の時を示せども、現代の文には終止形の外用ゐること少なし。

### 第六章 動詞と法の助動詞との連結

(動詞の法)

前課に於て動詞の時を示す方法を學べり。然るにこれにては動作をありのままに述べて、たゞ動作の起る時間を明瞭にしたるのみ。故に「讀むだらう」の意にて推

例 311  
 推量 彼は力にハカキ  
 世に力にハカキ  
 義務 彼は力にハカキ  
 能力 彼は力にハカキ

量をあらはし、「讀む筈だ」の意にて義務をあらはす如き、  
 種々の意をあらはすには、法の助動詞との連結を形造ら  
 ざるべからず。

- |     |       |          |      |
|-----|-------|----------|------|
| (イ) | 讀むべし。 | 讀むだらう    | 推量の法 |
| (ロ) | 讀むべし。 | 讀む筈だ     | 義務の法 |
| (ハ) | 讀むべし。 | 讀むことが出来る | 能力の法 |
| (ニ) | 讀むべし。 | 讀め       | 命令の法 |

べしを附加へて右の如き種々の意味を示すことを得。

(注意) 命令法は「讀め」といふ命令形にてもいひあらはし得れども、「讀むべし」といふべしを附加へてもいひあらはし得るなり。

(イ) 推量の法 (四つの時)

(三)「明日は雨降るべし」「明日は雨降るなるべし」といへば

推量 言ふ受て起  
 推量 言ふ受て起  
 推量 言ふ受て起

「雨が降るだらう」といふ推量をあらはす。推量の法にはべし又はなるべしを添ふるなり。之を時にあてゝ考へよ。

- |    |          |      |            |
|----|----------|------|------------|
| 現在 | 讀むべし。    | 現在完了 | 讀みたるなるべし。  |
| 過去 | 讀みしなるべし。 | 過去完了 | 讀みたりしなるべし。 |

(注意) 口語にては現在完了過去過去完了の區別なし。

推量には右の如く四つの時あり。未來の時なし。

(ロ) 義務の法 (三つの時)

(三)「丁年に達すれば兵役に服すべし」といへば「服す筈だ」「服さねばならぬ」といふ義務の意味をあらはす。

- |    |         |         |
|----|---------|---------|
| 現在 | 讀むべし。   | 讀む筈だ    |
| 過去 | 讀むべかりき。 | 讀む筈であつた |

推量 言ふ受て起  
 推量 言ふ受て起  
 推量 言ふ受て起

未來 讀むべからん(べけん) 讀む筈だらう

右の如く三つの時ありて、完了の時なし。

(注意) べからんは約りてべけんとも用ゐらる。

(ハ) 能力の法 (三つの時)

(三三) 「六尺の屏風も躍らば越ゆべし」は「越えることが出来る」といふ能力の意を示す。これにも義務の法と同じく三つの時あり。

現在 讀むべし 讀むとが出来る

過去 讀むべかりき 讀むとが出来た

未來 讀むべからん(べけん) 讀むとが出来よう

(注意) これは助動詞にて能力をいふ場合なれども、現今の文にては「讀み得」「讀むとを得」の如く得といふ動詞を以て能力を示すと

多し(第十五章参照)

(ニ) 命令の法 (一つの時)

(三三) 「規則を守るべし」といへば「規則を守れ」といふ命令の意に用ゐたるものなり。この場合にはたゞ一つの時あり。  
現在 讀むべし

命ぜられたる動作は未來に起ることなれども、命令の動作は現在なり。過去又は未來の命令なし。

第七章 動詞と否定の助動詞との連結

(動詞の式)

(三七) 「これ迄學べるはいづれも動詞の肯定をいふ場合なり。動作を打消すにはず又はざりの助動詞を用ゐるなり。

この關係を示せば

讀む 肯定的式

讀まず 否定の式

となる。之を時にあてゝ考へ見よ。

現在 讀まず

讀まない

過去 讀まざりき

讀まなかつた

未來 讀まざらん

讀まなからう

(注意) 現今の文語には完了の時なし。

(三六) 更に之を法にあてゝ考へよ。

(イ) 推量の法

現在

讀まざるべし

讀まないだらう

過去

讀まざりしなるべし

讀まなかつただらう

(ロ) 義務 (ハ) 能力の法

現在 讀むべからず

(ロ) 讀んではならぬ

過去 讀むべからざりき

(ハ) 讀んではなかつた

未來 讀むべからざらん

(イ) 讀んではいけなからう

(ニ) 命令の法

現在 讀むべからず

(三五) 義務を示すものに限り一層其意を強くするため、二重

の打消を取ることあり。二重の打消なれば意味は肯定

現在 讀まざるべからず

讀まなくてはならぬ

過去 讀まざるべからざりき

讀まなくてはならぬ

未來 讀まざるべからざらん

讀まなくてはならぬ





生得とん... 敵は大...  
 三...  
 こゆ...  
 便法  
 第一変化...  
 第二変化...  
 第三変化...  
 第四変化...  
 注意  
 一...

(イ)の動詞の活用形はすべて未然形にして、(ロ)のはすべて連用形なり。故に助動詞のんに連るには未然形よりすべく、たりに連るには連用形よりすべきことを知る。之を助動詞の方よりいへば、んは未然形を受くるもの、たりは連用形を受くるものといふべし。かくの如く一つ一つの助動詞には何の活用形を受くるといふ定ありて、助動詞と助動詞と重り合ふ時にも、亦其規則に外れざるなり。

外国人等の始めてこの連結を學ぶ時には、非常なる困難を感ずべけれども、余等は自然に之を記憶して「讀まん」「有らん」を「讀むん」「有りん」ともいはず、「讀みたり」「有りたり」を「讀またり」「有らたり」などともいはず。いくつもの助動詞の連結する場合にも相互の連結を誤ることは極めて稀なり。

二...  
 三...  
 四...  
 五...  
 六...  
 七...  
 八...  
 九...  
 十...

今左に連結の誤り易き場合の二三を注意すべし。

右の如く完了時の助動詞「り」は四段活用、奈行變格活用、左行變格活用の動詞に限りて其え列の音より連るものなり。然るを下二段活用にも亦え列の音あるを以て、堪へり、受けりの如く誤り用ゐることあり。

(注意) 良行變格より、居れり「異なれり」と用ゐるをも從來は誤りとせり。(文法許容に關する事項第一項及び第四項を參照せよ。)

(美) 及<sup>○</sup>第<sup>○</sup>し<sup>○</sup>き 及<sup>○</sup>第<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>し<sup>○</sup>人 及<sup>○</sup>第<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>し<sup>○</sup>か<sup>○</sup>ども  
 時の助動詞「き」は連用形に連るものなれども、左行變格活用の動詞に限り、其未然形よりし<sup>○</sup>し<sup>○</sup>か<sup>○</sup>の兩形に連ること右に示すが如し。故に及<sup>△</sup>第<sup>△</sup>し<sup>△</sup>人 及<sup>△</sup>第<sup>△</sup>し<sup>△</sup>か<sup>△</sup>どもなど書く

は誤なり。  
四段活用の動詞よりこのし。しかに連るに押せし、残せしなど書くは左行變格活用又は左行下二段活用の接續と混同せるものなり。目下盛に行はる。

(注意) 附録文法許容に關する事項第八項を參照せよ。

〔三〕 落つべし 聞ゆべし 醫すべし

「べし」「べからず」は良行變格及び良行變格と同様に活用するものゝ外は、すべて右の如く終止形より連るものなり。然るを口語にて終止連體の差別なきが爲、落つるべし、聞ゆるべし、醫するべし。などの如く連體形を誤り用ゐることあり。

〔三六〕 落つるなり 聞ゆるなり 醫するなり

落つるなるべし 聞ゆるなるべし 醫するなるべし  
なりは連體形に連るものにて、従つて「なるべし」も亦連體形に連るべきものとす。然るを〔三〕の場合と反對に、「落つなり」「落つなるべし」「聞ゆなり」「聞ゆなるべし」「感ずなり」「感ずなるべし」の如く終止形を誤り用ゐる事あり。

〔三六〕 落つまじ 聞ゆまじ 醫すまじ

「まじ」も「べし」と同じく終止形に連るものなり。故に「落つるまじ」「聞ゆるまじ」「感ずるまじ」など連體形を用ゐるは誤なり。

〔四〕 讀まる	起きらる	讀ます	起きさす
死なる	棄てらる	死なす	棄てさす
有らる	見らる	有らす	見さす

感<sup>○</sup>ぜ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>る

感<sup>○</sup>ぜ<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>す

受身の助動詞にはる。らる。の二つあり、使役の助動詞にはし。む。の外にす。さす。の二つあり。いづれも未然形より連るものにして、ずは未然形にありの音を有する動詞に連り、らる。さすは其他の動詞に連ること右に示すが如し。(せらる。させらる。亦之に準じて知るべし。)

故に左行變格より受身、使役に續きて、感<sup>○</sup>動<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>る。感<sup>○</sup>動<sup>○</sup>せ<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>す。といふを當然とす。然るに近來は感<sup>○</sup>動<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>る。感<sup>○</sup>動<sup>○</sup>さ<sup>○</sup>す。の如く用ゐること多し。

(注意) 附録文法許容に關する事項第五、六項を參照せよ。

使役の助動詞し。むは亦未然形を受くるものなれば、「見し。む」「得し。む」といふべきを、今は「見せし。む」「得せし。む」といふ

こと多し。

(注意) 得し。むは附録文法許容に關する事項第七項を參照せよ。

練習七、左の文の動詞助動詞連結の誤を正せ。(現今許容せられたるものは其旨を答へよ。)

〔三〕

(イ) 勉強<sup>せ</sup>、甲斐<sup>あり</sup>て首尾よく及第せり。

(ロ) 一旦名聲を落<sup>せ</sup>しが後之を回復せり。

(ハ) 人情風俗は時代と國土とによりて異な<sup>れり</sup>。

(ニ) 本校所定の學科を修め正に其業を卒<sup>べり</sup>。

(ホ) 尊王の論盛にして幕府遂に倒<sup>れたり</sup>。

(ヘ) 一日も光陰を徒費<sup>し</sup>、ことなし。

(ト) 海外に輸出<sup>せ</sup>、總額は三百萬斤に超<sup>えり</sup>といふ。

〔三〕 〔三六〕 〔三五〕

(チ) 一覽せし人は東の入口より退場まひしせし。

(リ) 品物に手を觸るふべからず。

(ヌ) この處塵芥捨すべからず。

(ル) これ學生のすまじき所業なり。

(ワ) 猥わに出入すべからず。

(カ) 或は風呂ふを桶かかし或は工場かの蒸氣竈かを熱する等その便利數

(レ) 敵は必ず夜襲ふを企つなるべし。

〔四〕

(ヨ) 敵の大隊は我軍かに包圍かこまれて全滅ぜんめつしたり。

(タ) 資金しんきんを給して其好む所ところを研究けんきゅうさせたり。

(レ) 法皇忠盛ほうしゅうしんせいに仰せて之これを射やせしめらる。

(ツ) (子) (ナ)

(ツ) 希望者きぼうしやには出席しゅっせきすることを得えせしむべし。

(子) 舊規則きゅうきうじは今年限廢止けんとげんはいしさる。新規則しんきうじは明年一月より實行じやうぎさるべし。

(ナ) 諸藩しよばんに詔みことごとして之これを議ぎせしむ。

(ナ) 平家の大軍へいけだいてんは殆ど塵殺ちんころされ且戦いくさひ且退ひききて篠原成合しほはらなるしあひに到り、返り撃かへりげきつて大に戦いくさふ。

### 第十章 形容動詞と助動詞との連結

〔四〕ら。行變格と同じき活用を有する形容動詞は亦助動詞に連結することを得。其連結は左の如し。

(肯定)

現在 詳なり

過去 詳なりき

未來 詳ならん

(否定)

現在 詳ならず

過去 詳ならざりき

未來 詳ならざらん

〔四〕 法を加ふれば。

(イ) 推量の法

現在	詳なるべし。	詳ならざるべし。
過去	詳なりしなるべし。	詳ならざりしなるべし。

(ロ) 義務 (ハ) 能力の法

現在	詳なるべし。	詳なるべからず。
過去	詳なるべかりき。	詳なるべからざりき。
未来	詳なるべからん(べけん)	詳なるべからざらん

〔四〕 又使役の相を有することを得。

現在	詳ならしむ。	詳ならしめず。
現在完了	詳ならしめたり。	
過去	詳ならしめき。	詳ならしめざりき。

四三  
あり  
あり

過去完了 詳ならしめたりき。

未来 詳ならしめん 詳ならしめざらん

未来完了 詳ならしめたらん

〔四〕 使役の相も亦種々の法を有することを得。繁を避け  
てこゝに擧げざれば、類推して之を知るべく、疑はしくば  
第二表に就いて之を知るべし。

〔四〕 月明にして、星稀なり。

舉止閑雅にして、容姿美麗なり。

形容動詞は文の半途にあるときは、右の如く本のありに連  
らぬ形より、しての助詞に連ること多し。

練習八、左の連結の相式、法を問ふ。

美しからず 式(否定)  
 練習九 なかり (法)  
 なかり (かみん、しめらる) (いみむ、け、せりき)  
 なかり(ぎけり)

美しからず 強壯ならざるべからず  
 なかりの形容動詞のあらゆる連結を示せ。

### 第十一章 時、法、相の意義の轉換

〔四〕 未來 讀まん……………讀まらう  
 未來完了 讀みたらん……………讀んだらう  
 使役相の未來 讀ましめん……………讀ませよう  
 能力法の未來 讀むべからん……………讀める筈だらう  
 右の如く未來の時を示すすべての連結は、口語にても、文語にても、推量の法を示すにも用ゐらるゝなり。  
 これ時の助動詞の法の助動詞に轉じたるなり。  
 〔五〕 推量の法 讀むべし 讀むだらう

推量の否定 讀まざるべし 讀まないだらう  
 右の口語に照しても明瞭なる如く、推量法は亦未來の時として用ゐらるゝことを知るべし。これ法の助動詞の時の助動詞に轉じたるものなり。

〔六〕 受身の相 讀まる 讀まれる  
 使役の受身の相 讀ませらる 讀ませられる  
 右の口語に照しても明瞭なる如く、受身、又は使役の受身は敬語として用ゐらるゝことを知るべし。又敬語は動詞の給ふを助動詞に用ゐて使役相の下につけ、  
 讀ませ給ふ  
 といふこともあり。古文にては敬語相のみにては敬語となるなり。

これ相の助動詞の敬語の助動詞に轉じたるものなり。

練習十、左の連結の意味を口語にて述べよ。

- (イ) 佐藤先生は去年獨逸國より歸朝せられたり  
新聞雜誌も備へありて、居ながら歐米各國の近狀も知らるゝ  
なり。
- (ロ) 書籍室は船の前方に在り。凡そ二十疊を敷くべし。  
毎日千字づゝ書き出すべしと命せられたり。
- (ハ) 今の境遇にて正式の學校に入學せんことおもひもよらず。  
蟻の舉動を観察せよ。彼等の身長よりは幾十倍もわらんかと  
思ふ昆蟲をも運搬し行くなり。
- (ホ) 來十日午前八時御出門陸軍士官學校へ行幸仰出ださる。  
昔フリードリッヒ大王この木の下にて民の訴を聞かれたり  
とて王の木の名あり。
- (ニ) (ハ) (ロ) (イ) (ホ) (チ) (ト)

指定、即御例  
あり、用を連体ラック  
指定、用を連体ラック  
あり、用を連体ラック  
あり、用を連体ラック  
あり、用を連体ラック  
あり、用を連体ラック

第十二章 指定及び比較の助動詞の連結

〔四〕 知りしなるべし。

知りたりしなるべし。

右の如く、推量の法にはなりの助動詞の用ゐらるゝことをいへり。元來この助動詞は勢を強め、或は指定する意味を有する助動詞にて、各種の連語は、皆最後に「なり」の形を有することを得るなり。左の例を見よ。

- 讀む……………讀むなり。
- 讀みたり……………讀みたるなり。
- 讀ます……………讀まするなり。
- 讀ませず……………讀ませざるなり。

讀まるべし……讀まるべきなり。

讀ませられざるべし……讀ませられざるべきなり。

美しかりき……美しかりしなり。

美しからざりき……美しからざりしなり。

連體形に接續することは(三)にいへるが如し。この助動詞

は亦普通の形容詞の連體形にも連る。

(五) 正成は忠臣なり。

三つと二つとの和は五つなり。

舜も人なり我も人なり。

我は我なり彼は彼なり。

右の如く「なり」は體言の下にもつゞくことを知るべし。

(五) 父父たらざれども子子たり。

比較助動詞 如し  
用言を已むるに用言より上りて  
體言より上りて用言より上りて  
依りて  
用言より上りて用言より上りて  
用言より上りて用言より上りて  
用言より上りて用言より上りて  
用言より上りて用言より上りて

これは何たることぞ

右の如く「たり」は體言にのみつくものなり。

なり、たり、の二つを指定の助動詞といふ。

(五) 天女を見るが如し

花の如し

右の如く體言よりはの、用言よりはがに連り、然る後比較の助動詞「如し」に續く。但し用言の場合にはがを省くこともあり。

### 第十三章 活用連語

(五) 第五章以下動詞形容動詞と種々の助動詞との連結を學べり。以て助動詞の功用の甚だ大なるを知るべし、

用言助動詞

而してこれ等の助動詞の重り合ふには自ら一定の順序あるものなり。

(一)使役 (二)受身 (三)敬語 (四)打消 (五)完了の時 (六)普通の時 (七)指定 (八)法

書かせ……られ……ず。

書き……給ひ……たり……き。

書く……なる……べし。

書か……れ……給は……ざり……き。

書かせ……給は……ざり……し……なる……べし。

かくの如く必要ある場合にそれらの助動詞を添へて用ゐるものにして、しかも其順序を紊すことなし。此順序の如きも亦、吾等は自然に之を感じ得るを以て、別に記憶する必要なし。

すべし  
いふ  
金若し  
序後

おるなり変化

ひの例類の如き程あり  
毎法は終にはなるを別  
全う前へ行けり

讀まれざりしむ

さうして後が時ハリト云  
用言がト固クテ  
依テ之歸ナリ

〔五〕 驚くべき程<sup>は</sup>發達したりしなり。

感ぜしむる能はざりき。

書かざるにあらず。

右の如く體言、用言、助詞に逢ふときは連結の順序は又前に戻り行くなり。

〔五〕 故に「ざり」「べかり」の如きありの動詞を含みたる助動詞と逢へば、連結の順序又前に戻るなり。そは別表の連結を見て知るべし。

〔五〕 動詞又は形容動詞の下にいくつもの助動詞の重り合ひたるときは、之を一つの單純なる動詞若くは形容動詞と見做して取扱ふべし。而して其連結の最終にある助動詞の活用を以て其活用と見做すべし。左の例を見よ。

書かしのしめは  
けいはいしめかきし甲とす

未然	連用	終止	連體	已然	命令
書かしめば	書かしめ	書かしむ	書かしむる	書かしむれども	書かしめよ
書かせたらば	書かせたり	書かせたり	書かせたる	書かせたれども	書かせたれ
書かれざらば	書かれず	書かれず	書かれざる	書かれざれども	書かれざれ

(注意) 「論せずんば、聞くべくんば」の如く未然の場合、んを挿むことあり。これは單に口調の爲めなり。

用言と助動詞との連結せるものを活用連語といふ。

練習十一、左の活用連語の未然形、連體形、已然形を示せ。

- 論ぜざるべし 堪ふべからず
- 出發し給ふ 盛大なりしなり
- 感ぜしむ

大は長らえ給ふ  
論ぜざるべし 未だ  
連體 未だ  
未だ 未だ  
未だ 未だ  
未だ 未だ  
未だ 未だ  
未だ 未だ

感ぜしむ  
未だ 未だ  
未だ 未だ  
未だ 未だ  
未だ 未だ

練習十二、左の文に誤謬あらば指摘せよ。(許容せられたるものは其旨をことわれ。)

- (イ) 大納言にして右大將を兼ねしめり。
- (ロ) 馬尼刺市は一萬の西班牙兵に防禦されありといふ。
- (ハ) 彼等が一致協力の方は甚だ強固なれば、之によりてわれ等には想像し得べからざる大事業をも成し遂ぐなり。
- (ニ) 我東宮殿下のかしこくも天皇陛下の聰明に似させ給へて、御克己の徳に富ませ給ひること、承り奉る毎にいと忝くこそ覺ゆれ。
- (ホ) 御後影の見ゆ、限り目送し奉りて本の席にかへりしが、さて見れば、かのわが跨火にし、小火鉢は依然としてそこにあれり。

成、遂ぐるなり  
ニ、給ふ  
給ひ、給ふ  
見ゆる。  
せし、あらたり

### 第十四章

### 用言及び活用連語と助詞との連結

〔五〕

の	花を見るの記	何ぞ思はざるの甚しき
が	信ずべきが如し	甚しかりしが如し
を	知らざるを知らずとせよ	論ぜざるを得ず
に	忍耐の久しきに驚く	
へ	餘り疎遠なるへは通知せず	
より	日の出づるより	
まで	日の没するまで	
と	愛すると愛せざると	小なると大なると

にといふより「が」を「まじ」  
 「商標」を「しんぼう」  
 「を」直接に「を」  
 「は」も「が」より「は」  
 「に」も「が」より「に」  
 「へ」も「が」より「へ」  
 「より」も「が」より「より」  
 「まで」も「が」より「まで」  
 「と」も「が」より「と」

「は」は「は」  
 「を」は「を」  
 「に」は「に」  
 「へ」は「へ」  
 「より」は「より」  
 「まで」は「まで」  
 「と」は「と」

は 今の世に生れたるは、大なる幸なり  
 も 行くも歸るも別れては  
 ぞ 何故なるぞ  
 こ そ 言はざるこそよけれ  
 の み 馬前まざるのみ  
 か 行くか歸るか 旅順は今日中に陥落すべきか  
 や 余の始めて學校に入學するや  
 よ 面白き事を見たるよ この繪のうつくしきよ  
 かな いふべきかな

右の如く、體言の下につきたる助詞(第一章参照)はすべて動詞、形容詞または活用連語の連體形の下に添ふことを得。かゝる場合には、その動詞、形容詞又は活用連語を一つの體

あり

言と見做せば明瞭なるべし。

次に二三の連體形よりつゞかぬものを擧げん。

〔五〕 論ずる人ありといふ 行くべしと論ず

見たる人なしといふ

〔五〕 に擧げたる「と」は物を並べて比較するものにて、そ

の時のみは連體形に連れども、その他は右の例の如く終止形につゞくものとす。

(注意) 附録文法許容に關する事項第十二項を参照せよ。

〔五〕

(イ) ありやなしや。

(ロ) 汝は日本國民に非ずや。

(ハ) 奮起せよ日本男兒

疑問に用ゐる「や」は終止形よりつゞき、命令に用ゐる「よ」

や字 連體形より終止形  
指定 例 予は日本國民に非ず  
文法 例 汝は日本國民に非ず  
感歎 意をなすこと  
例 予は日本國民に非ず

ば命令形よりつゞくこと、この例を見て知るべし。

(注意) (一) 疑問の「や」は亦反語の意をなすこと(ロ)の例にて

知るべし。

(二) 一いつ、幾許、何處、の如き疑問の詞上にある時は下

に「が」の助詞を用ゐる。

(注意) 附録文法許容に關する事項第十項及び第十四項を参照せよ。

花 咲かば 告げん

無くば 幸なり

樂あれ ば 苦あり

遠ければ 行かず

悔ゆれども 及ばず

廉なれど 品悪し

如何なる事ありとも

如何に美麗なりとも

花 咲きて 散る

上書して 諫む

右の「ば」「ども」「とも」「て」「は」、體言には附屬せざる助詞にて

「ば」字  
例 咲かば告げん  
例 悔ゆれども及ばず  
例 如何なる事ありとも  
例 花咲きて散る

用言、活用連語のみに附屬す。ばは場合によりて、未然形已然形より、どもは已然形より、ともは終止形より、形容詞は連用形より、ては連用形よりつゞく。

ばは前後相應ずることに用ゐ、どもどもは前と後と相背くときに用ゐる。ては前と後とを接續するものなり。

(注意) どもどもを用ゐるべき所にもを用ゐる事今の文に多し。

(注意) 附録文法許容に關する事項第十一及び第十五項を參照せよ。

(三) 終日待ちたるが何の音便もなかりき

日はまだ暮れざるにはや暗くなれり  
今日降るべしとは思はざりしを

右の「が」「に」「を」は(吾)に擧げたるものと異り、用言若くは活

は字の意の誤  
二種相連語としてある  
は字の意の誤  
果とたすもの  
比もYの意の誤  
二種相連語としてある  
は字の意の誤  
比もYの意の誤

用連語にのみ、續くものにて、體言には續かず、どももの如く前の事と後の事と相背く場合に用ゐる。連體形よりつゞくことは、前の「が」「に」「を」に同じ。

練習十三、左の用言、活用連語に接續の誤あらば正せ。(許容あるものは其旨をことわるべし)

- (イ) 數日の旅行に過ぎざりしも得るところは少からざりしと信ず
- (ロ) 八百と十五との差は幾何なる
- (ハ) 少年の時學ばざれば老年に至りて悔ゆ及とも及ぶべからず。
- (ニ) 人は權利を有す~~と~~ともに義務をも有す。
- (ホ) 歲月は流る如し。
- (ヘ) 人と禽獸との區別は言語を有すと有せざる~~と~~に在りと論ずる

流る、如し  
有する

イロシキト

あつてもや

持たするまあり

在すらりけ

人あり。

(ト) 出席せるや否やを検して後問題を與ふべし。

(チ) 昔の行列の繪などに見ゆる美き傘に、金紙の飾つけたるを從者に持たすもあり。

(リ) 戦路に添へる電信線は悉く切斷せられて、北京天津間の交通は通州を通過する一條の電線を存すのみ。

### 第十五章 用言の慣用語句

〔三〕 用言、活用連語は一旦助詞、體言又は他の用言に連りて更に又他の用言、活用連語に連るるあり。〔五〕 参照かくして或は能力或は命令或は願望等、其他種々のいひまはし方一層自在になるなり。今其中にて最も普通に用ゐら

れて、己に一箇の活用連語の如くなれるものを、知るといふ動詞につきて、左に擧げん。

〔三〕 知るに足る。

知るを得。

知るといふべし。

知らんとす。

知らんと欲す。

知るべければなり。

知らしむるにあり。

知らしむるを要す。

知りたりといふ。

知らざるに非ず。

知るべくもあらず。  
知らざるのみならず。  
右はいづれも種々の助詞に連りて、更に下の用言、活用連語に移れり。

〔四〕

知らざる所なり。  
知らしむること勿れ。  
知ること能はず。  
知るべきこと多し。  
知らしめざることならん。  
知らしむべからざる所以なり。

〔五〕

右は體言に連りて、更に下の用言、活用連語に移れり。  
知る能はざるなり。

〔六〕

右は用言に連りて、他の活用連語に移れり。  
未來の意味より、推量の法の意味に轉じたる連語を、更に反語の意味に用ゐること多し。それには上に適當なる副詞、代名詞等を添へ、下には感歎の助詞やを添ふるを多し。

誰か之を知らんや。  
豈に知らざらんや。  
安ぞ知らんや。  
豈に知らざるべけんや。

右の如きは日常の文章に最も普通に用ゐらるゝものなれば、よくその意義と用法とを知り置くべし。

練習十四、左の活用連語を口語にいひ換へよ。



例 水流る

猿美し

猿美し

父母たり

自まゝ空、如し

自前、血前、百利

途、途、途、途

雪、降る、(他)

氷、飲む、(他)

字、書く、(他)

鳥、啼く、(自)

聲、好む、(自)

地震(山を崩す)

右の文にて「落す」「崩す」といへば、「猿落す」「地震崩す」とのみいふときは、何を落すか、何を崩すか明瞭ならず。「柿を」「山を」といひて意味始めて完し。かくの如く主語、述語の外に他の何をといふ語を要する動詞を名けて、他動詞といふ。この場合に「何を」にてあらはされたる體言を客語といふ。「落す」「崩す」の如き動作は、動作者(主語)の外に其動作の及ぶ目的物(客語)なければ動作の成立することなし。

〔充〕 旅人 路を 問ふ

父 褒美を 與ふ

右の二文にて旅人、父は主語なり。問ふ 與ふ は述語、路、褒美は客語なり。然れども「問ふ」「與ふ」の動作は、問はるゝ人

與へらるゝ人なければ成立すべからず。かくの如き動作は動作者(主語)と動作の目的物(客語)との外に動作を仕向けらるゝ人ありて、動作始めて成立するなり。

旅人 里人に 路を 問ふ

父 子に 褒美を 與ふ

「里人」「子」を加へて動作の關係始めて明瞭なり。故に問ふ、與ふの如き動詞は第一客語の外尙第二の客語を要するものなり。

他動詞には二つの客語を要するものあり。

〔吉〕 自動詞他動詞には、同一語原より出てゝ其活用を異にするものあり。例へば、

家焼く。(下二段) 餅を焼く。(四段) 雨やむ。(四段) 運動を止む

(下二段)

〔七〕 同一の動詞にして或時は他動に用ゐられ、或時は自動に用ゐらるゝものあり。例へば

花開く(四段) 戸を開く(四段)

練習十五、左の動詞の自他を辨ぜよ。

沈む	分く	分つ	戦ふ	整ふ	知る	散る
流る	流す	宿る	宿す	焼く	退く	攻撃す
主張す	立つ	敗北す	出發す	評す		

練習十六、左の自動詞に對する他動詞を擧げよ。

見ゆ	亡ぶ	起く	開ゆ	倒る	終る	始る
----	----	----	----	----	----	----

命々他動人申カケテ  
沈む共看又同航況  
他人カケテ  
戦自部人戦  
魁ふ共看又同航況  
知る他散自散

見る 七下す 起るす  
倒る 始る

練習十七、左の他動詞中、第二客語を要するものを指摘せよ。

教ふ	問ふ	願ふ	與ふ	思ふ	見る	食ふ	加ふ
----	----	----	----	----	----	----	----

思ふ 見る 食ふ の三番  
第二客語を要せん

### 第十七章 主語の轉換

〔三〕 母死ぬ

太郎 蟬を捕ふ

父子に 財産を讓る

右の例にて死ぬは自動詞にして捕ふ、讓るは他動詞なり。

この場合に於て主語たる母、太郎、父はいづれも動作者なり。

〔三〕 子 母に 死なる

右の如く自動詞より受身の形を作るときは、子、即ち動作を蒙るもの「死なる」に對して主語となり、これまでの主語即動作者は「に」の助詞を探りて第二客語の如き形をなす。自動詞より受身の作らるゝ場合には動作を蒙るもの新に加はり來りて、主語となり、これまでの主語客語となる。

(注意) 英語にては自動詞より他動詞の生ずることなし。

〔五〕 蟬、太郎に捕へらる

かくの如く他動詞より受身を作るときは、これまでの客語たる蟬は「捕へらる」の主語となり、これまでの主語、即ち動作者は「に」の助詞を探りて第二客語の如き形をなす。

他動詞より受身の作らるゝ場合には客語主語相轉換す。

〔五〕 子 父より 財産を 讓らる

主語 名詞代名詞動詞  
 受身 元一を捕へらる  
 主語 元一はとらるる  
 受身 元一はとらるる  
 主語 元一はとらるる  
 受身 元一はとらるる  
 主語 元一はとらるる  
 受身 元一はとらるる

財産 父より 子に 讓らる

二つの客語を要する他動詞より受身を作るときは、かくの如き二様の受身を生ず。一はこれまでの客語主語となり、一はこれまでの第二客語主語となる。

一つの客語の主語に變じたるときは他の客語は本のまゝなり。

〔五〕 (1) 敵軍退く  
 (2) 下女餅を焼く

(1)は自動詞にして(2)は他動詞なり。この場合に於て、敵軍下女は動作者にして、退く、焼くに對する主語なり。

〔五〕 之を使役の形に改めて 敵軍に退かしむ

使役相 する  
 受身相 する  
 受身相 する  
 受身相 する

下女に餅を焼かしむ

とするときは、敵軍を退く様に仕向けたるもの、餅を焼かしめたるもの、主語たらざるべからず。例へば

我が軍の攻撃は 敵軍に 退かしむ

主婦は 下女に 餅を 焼かしむ

の如くならざるべからず。かくなれば、これまでの動作者即ち主語は客語となる。而して

敵軍に 退かしむ 下女に 餅をやかしむ

敵軍をして 退かしむ 下女をして 餅をやかしむ

の如く、二様にいひ得べきを以て、これまでの主語は「に」又は「を」して「を」とりて、第一客語若くは第二客語の形をなすといふべし。故に

自動詞又は他動詞より使役の動詞を作るときは、動作の命令者新に入り来りて主語となり、これ迄の主語は客語となる。

〔六〕 我軍 敵に退かしむ

主婦 下女に餅を焼かしむ

右の使役より更に受身を作りて、

敵軍 我軍に 退かしめらる

下女 主婦に 餅を焼かしめらる

とすれば、使役せらるゝもの主語となるが故に、退く、焼く、の動作者再び主語となり、命令者は客語となり、「に」の助詞をとりて第二客語の形をなす。

〔七〕 敵軍 我軍の爲めに 略取せらる

我軍 大隊をして 敵兵を討たしむ  
 主婦 下女に命じて 餅を焼かしむ  
 客語は文章上の句調、其他の關係により、單純に「に」又は「を」  
 をとりてあらはるゝこと少く、右の如き別種の形をなすこ  
 と多しと知るべし。

練習十八、左の文を受身の形に改めよ。

- (イ) 公曉實朝を殺したり。庚朝公曉に殺せしむ
- (ロ) 猫鼠を捕へんとす。
- (ハ) 慈善家乞食を救はず。乞食

練習十九、左の文を使役の形に改めよ。すすしむ

(10)



第十八章 補語

(イ) 造營成る。

雀蛤となる。

練習二十、左の文を使役の受身に改めよ。常ニ使役するモシテ

- (イ) 笠置艦太沽に派遣せらる。
- (ロ) 敵兵退却す。
- (ハ) 我軍敵を撃退す。

- (イ) 牧童牛を曳く。牛を牧童に曳かしむ
- (ロ) 兒童文を作らず。兒童を文を作らしむ
- (ハ) 舟沈めり。舟を沈めしむ

初動詞の明瞭なる

(イ)の成るは自動詞にして主語のみにて動作の成立することと上段の例に照し見て明なり。然れども下段の例を見れば雀なる湯なるにては何になるか明瞭ならず。蛤と水にといひて始めて明瞭なり。(ロ)の成す定むは他動詞にして主語と客語とにて動作の成立するものなれども、下段の例にては氷を、華盛頓をのみにては何になしたるか、何と定めたるか明白ならず。水に、大統領とといひて始めて明瞭になるなり。

かくの如く用ゐられたる語を補語といふ。故に自動詞に

(ロ) 偉人は大業を成す。  
 天皇憲法を定む。

湯水になる。  
 氷を水になす。  
 華盛頓を大統領と定む。

も他動詞にも、補語を取るものありと知るべし。

(注意)

(一) 補語はと或はにの助詞を伴ふ。  
 (二) 客語も亦にの助詞を伴ふことあれども、紛るべからず。客語は前課に説けるが如く主語の轉換によりて主語となり得れども、補語は決して主語となること能はず。

(九)

(八二) 余は六時に起きたり

今日東京に着す

右の如く時間或は場所をいふものは亦同じくにの助詞を伴へり。これは副詞の功用をなすものにて補語にあらず。文もとより客語にもあらず。

(八三) 秋草爛熳と咲く

たさほ

れりやけりていれり  
副詞申すに  
客語をいへる

櫻花は奇麗に咲きたり  
右の爛熳と奇麗には形容動詞にして補語にあらず。又も  
とより客語にもあらず。

(八三) 趣味自然に生ず

光秀蹶然として立つ

右の自然に蹶然とは副詞にして補語にあらず。又もとよ  
り客語にもあらず。

練習二十一、左の文より客語補語を指摘せよ。

- (イ) 中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といへり。
- (ロ) 荷物を東京より京都まで輸送す。
- (ハ) 舟或は右に傾き或は左に傾く。

(二) 二月十一日を紀元節と定む。  
信用を得んと欲せば時間を堅く守らざるべからず。

明治四十二年二月二十七日  
中等教科 明治文典 訂正卷之二終

附錄 三、文法上許容に關する事項

- 一、「居リ」「恨ム」「死ス」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
- 二、「シク・シシキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ

例

- 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ
- 金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ
- 四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ
- 五、「ハ」「セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「レ、レセラル」トイフベキ場合ニ、「レ、レサル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

罪サル

評サル

解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」

ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、テにをはノハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

シ

例

花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十、疑ノテにをはノハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ 母ニ似タルヤ

十二、てにをばノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルルトモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二、てにをばノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見ユテ

嘲弄セラルト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

十三、語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをばノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキ

ニ限リ最終ノ語句々下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳①ヲ讀ムベシ

十四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをばノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

十五、てにをば「モ」ハ誤解チ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ  
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ  
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解チ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ  
給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

十六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例

イハユル哺乳獸ナルモノ  
顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セララルモノハ徳川時代國學者ノ研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

Handwritten text in a rectangular frame, oriented vertically. The text is extremely faint and illegible, appearing to be a list or a series of entries.

目録

活用連語表第一

役使			相身受				相常通				相		
ノ能力義務	法ノ量推	法ノ常通	ノ命令	(消ノ二重)義務	ノ能力義務	法ノ量推	法ノ常通	ノ命令	(消ノ二重)義務	ノ能力義務	法ノ量推	法ノ常通	法式
現在 過去 未だ	現在完了 過去完了 過去	現在完了 過去完了 過去	現在	現在 過去 未だ	現在 過去 未だ	現在完了 過去完了 過去	現在完了 過去完了 過去	現在 過去 未だ	現在 過去 未だ	現在 過去 未だ	現在完了 過去完了 過去	現在完了 過去完了 過去	肯定
讀マシムベシ	讀マシムタルベシ	讀マシムタルベシ	讀マルベシ	讀マレザルベカラズ	讀マルベシ	讀マレザルベカラズ	讀マレザルベカラズ	讀ムベシ	讀マザルベカラズ	讀ムベシ	讀ミタルベシ	讀ミタルベシ	ナラドクシテ
現在 過去 未だ	現在完了 過去完了 過去	現在完了 過去完了 過去	現在	現在 過去 未だ	現在 過去 未だ	現在完了 過去完了 過去	現在完了 過去完了 過去	現在 過去 未だ	現在 過去 未だ	現在 過去 未だ	現在完了 過去完了 過去	現在完了 過去完了 過去	否定
讀マシムベカラズ	讀マシムベカラズ	讀マシムベカラズ	讀マルベカラズ	讀マレザルベカラズ	讀マルベカラズ	讀マレザルベカラズ	讀マレザルベカラズ	讀ムベカラズ	讀マザルベカラズ	讀ムベカラズ	讀ミタルベシ	讀ミタルベシ	

意 注

(5) (4) (3) (2) (1)

完了の時の助動詞にはタリの連結のみを挙げたり。この外にヌあり。又四段、左行變格、奈行變格はリに連ることを得(第九章三五節參照)  
 使役の助動詞としてはシム<sup>●</sup>の連結を挙げたり。此外にス、サス<sup>●</sup>あり(第八章三一節參照)  
 マ<sup>●</sup>の連結は略せり。  
 ナリはナリを含まぬすべての連結の下につく。  
 此表には本來の意義のみを主として挙げたり。意義の轉換に就ては第十一章を參照せよ。

相ノ身受ノ役使					相ノ役使					相ノ身						
命令 法	(消ノ二重) 義務	能力 ノ法	義務 ノ法	法ノ量推	法ノ常通	命令 法	(消ノ二重) 義務	能力 ノ法	義務 ノ法	法ノ量推	法ノ常通	命令 法	(消ノ二重) 義務	能力 ノ法	義務 ノ法	法ノ量推
現在	未過現 來去在	未過現 來去在	未過現 來去在	過去完了 過去	現在完了 現在	現在	未過現 來去在	未過現 來去在	未過現 來去在	過去完了 過去	現在完了 現在	現在	未過現 來去在	未過現 來去在	未過現 來去在	過去完了 過去
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ
現在	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マシムベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ	讀マシムベシ	讀マルベシ	讀マシメラルベシ

相ノ役使				相ノ常通			
(二重) 打消 義務	ノ能義 法力	ノ推量	ノ通常 ノ法	(二重) 打消 義務	ノ能義 法力	ノ推量	ノ通常 ノ法
現 在 詳ナラシメザルベカラズ	未過現 來去在 詳ナラシムベカリキ 詳ナラシムベカラン(ベケン)	過現 去在 詳ナラシムルナルベシ 詳ナラシメシナルベシ	未過現 來去在 詳ナラシメタリキ 詳ナラシメタラン	現 在 詳ナラザルベカラズ	未過現 來去在 詳ナルベカリキ 詳ナルベカラン(ベケン)	過現 去在 詳ナリシナルベシ	未 來 詳ナラン
未過現 來去在 詳ナラシムベカラズ 詳ナラシムベカラザリキ	過現 去在 詳ナラシメザルナルベシ 詳ナラシメザリシナルベシ	未過現 來去在 詳ナラシメザリキ 詳ナラシメザラン	未過現 來去在 詳ナルベカラズ 詳ナルベカラザリキ	未過現 來去在 詳ナルベカラズ 詳ナルベカラザラン	過現 去在 詳ナラザリシナルベシ	未 來 詳ナラザラン	

活用連語表第二

(一) 否定式ヨリ使役相ニナレル動詞ノ活用連語(三三節注意参照)

相ノ常通				相	
法	命令	能力義務	推量	通常	法式
現在完了 過去完了 未完了	現在完了 過去完了 未完了	現在完了 過去完了 未完了	現在完了 過去完了 未完了	現在完了 過去完了 未完了	肯定
詳ナラシム	詳マレザラシム	詳マレザラシム	詳ナリシナルベシ	詳ナラザルベカラズ	否定

(二) 形容動詞ノ活用連語(第十章参照)

相ノ常通				相	
法	命令	能力義務	推量	通常	法式
現在完了 過去完了 未完了	現在完了 過去完了 未完了	現在完了 過去完了 未完了	現在完了 過去完了 未完了	現在完了 過去完了 未完了	肯定
詳ナラシム	詳マレザラシム	詳マレザラシム	詳ナリシナルベシ	詳ナラザルベカラズ	否定

注意

- (1) この表に挙げたる連語は使役の相としてシムに連るのみにてス、又はサスに連る事なし。
- (2) この表に挙げたる連語は完了時のヌに續かず。
- (3) 指定の助動詞ナリ、タリ(第十二章参照)はこの表の(二)の如き活用連語をなすものと知るべし。
- (4) 〇〇〇ベカリより使役になれる活用連語は(一)に準じて知るべし。

相ノ役使				相ノ常通				相	相ノ身受				相ノ常通			
義務 (二重) 打消	ノ能力 法務	ノ推量 法量	ノ通常 法常	義務 (二重) 打消	ノ能力 法務	ノ推量 法量	ノ通常 法常	法式	ノ命令 法令	ノ能力 法務	法ノ量推	法ノ常通	法令	ノ能力 法務	法ノ量推	法ノ常通
現在	未過現 來去在	過現 去在	未過現 來去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>	現在	未過現 來去在	過現 去在	未過現 來去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>	肯定	現在	未過現 來去在	過現 去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>	過現 去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>	現在	未過現 來去在	過現 去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>	過現 去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>
	未過現 來去在	過現 去在	未過現 來去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>		未過現 來去在	過現 去在	未過現 來去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>	否定		未過現 來去在	過現 去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>	過現 去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>		未過現 來去在	過現 去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>	過現 去在 <small>詳ナラシムベカリキ</small>

(二) 形容動詞ノ活用連語(第十章参照)

- 注意
- (1) この表に擧げたる連語は使役の相としてシムに連るのみにてス、又はサスに連る事なし。
  - (2) この表に擧げたる連語は完了時のヌに續かず。
  - (3) 指定の助動詞ナリ、タリ(第十二章参照)はこの表の(二)の如き活用連語をなすものと知るべし。
  - (4) 〇〇ベカリより使役になれる活用連語は(一)に準じて知るべし。

初段

捨虎半信甲

四段かたは下二有る也

上三カ初子あふぬら

一動詞格用の活用事

才請并を四段

第三類多きものは二二段

才四類并之人下二段

◎上二格は本一三節(三枚新拾遺の其事) 下一格は蹴一語子信下二段

是格は用は加統震三加一末(佐一着す但字言決、名詞を動と取扱はるる場合に字

奈一毛(種)の(良)有(金)侍(有)り(四)段(奉)ま(区)別は(四)段(傳)取(三)段(右)良(妻)は(才)段(三)段

先(伊)須(か)こ(ま)く(る)く(れ)こ(ま)◎(佐)せ(じ)す(す)す(れ)せ(よ)し(ぬ)す(期)す(喜)す(欲)す

初段

混おは二二段

行(是)場(合)下(二)文(法)は(四)段(下)段(り)し(例)う(け)う(う)ら

徳一あ(う)江(水)下(二)

比(法)は(三)段(う)ら

ゆ(ぬ)了(念)も

取(寄)

初段の音便

さ(か)じ(り)の(り)轉(出)は(念)は

解(り)し(解)り

磨(り)し(磨)り

差(り)し(差)り

の(り)し(の)り

保(り)し(保)り

死(り)し(死)り

味(り)し(味)り

の(り)し(の)り

四段	手(運)申(止)	運(止)申(手)
上二	さ(き)ゆ(き)	ゆ(き)さ(き)
下二	け(け)け(け)	け(け)け(け)
上二	お(お)お(お)	お(お)お(お)
下二	あ(あ)あ(あ)	あ(あ)あ(あ)
上二	い(い)い(い)	い(い)い(い)
下二	え(え)え(え)	え(え)え(え)
上二	う(う)う(う)	う(う)う(う)
下二	え(え)え(え)	え(え)え(え)

未(定)の(訓)重(用)難(し)

築(造)り(た)ば(も)の(か)

才(三)一(二)も

食(食)有(ら)有(り)あ(り)あ(れ)あ(れ)

飲(飲)下(下)わ(ら)有(ら)ば(三)段(不)あ(る)計(三)え

三(段)下(下)三(段)か(り)有(ら)ば(三)段(不)あ(る)計(三)え

飲(飲)下(下)三(段)か(り)有(ら)ば(三)段(不)あ(る)計(三)え

持(ち)し(持)ち

從(ひ)し(從)ひ

釣(り)し(釣)り

恨あはし二級  
 行々  
 得て  
 せん

くしえ  
 しえ  
 しえ  
 しえ  
 しえ

四段	下二	下三	下四	下五	下六
か	け	け	け	け	け
こ	こ	こ	こ	こ	こ
く	く	く	く	く	く
け	け	け	け	け	け
こ	こ	こ	こ	こ	こ
く	く	く	く	く	く

未強  
 未強

案  
 案

お  
 お  
 お  
 お  
 お

新  
 新

解  
 解  
 解  
 解  
 解  
 解

明明明明明明明	明明明明明明明
治治治治治治治	治治治治治治治
三三三三三三三	三三三三三三三
十十十十十十十	十十十十十十十
九九八八八七七	九九八八八七七
年年年年年年年	年年年年年年年
十十三二十二十	十十三二十二十
一月一月一月一月	一月一月一月一月
廿二十廿十八五	廿二十廿十八五
三十五四一八	三十五四一八
日日日日日日日	日日日日日日日
訂五四三訂訂發	訂五四三訂訂發
正版版正正	正版版正正
改印印再再	改印印再再
版刷刷版版	版刷刷版版
發印發發發	發印發發發
行行行行行	行行行行行

科教等中  
 典文治明  
 (正訂)  
 卷之一 正價金貳拾三錢  
 卷之二 正價金貳拾三錢  
 卷之三 正價金貳拾三錢



